S.O.S.～青春謳歌作戦～

完熟林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓ．Ｏ．Ｓ．～青春謳歌作戦～

【Ｎコード】
Ｎ９４７５Ｓ

【作者名】
完熟林檎

【あらすじ】
今年から高校に進学する橘　椛、桜井　椿、日向　陽彦の３人は、小さい頃からの大の仲良し。３人ともこれからの高校生活をとても楽しみにしている。
しかし高校生は多感な時期。部活、授業、委員会などの学校での出来事や、家族、友情、恋愛などの人間関係など、いろいろなことに悩み、考え、成長していく。
３人の視点で描かれる青春学園物語。

橘　椛（前書き）

はじめまして。学生のうちに何か形に残るものを思い出と残したいなと思い、小説を書くことにしました。小説は書いたことがないし、普段からあまり小説も読むほうではありません。このサイトも２日前に見つけたばかり。そしてＰＣも苦手で、いまだにキーボードを見て打ってます。そんな自分が学生のうちにこの物語を完結まで持っていけるのか、本当に不安です。読みづらいとこもたくさんあると思いますが、よろしくお願いします。

２０１１／０５／０３

橘　椛

４月、まだこの地域には桜は咲いていない。さすがに雪は残ってはいないが、まだ風は冷たく、朝布団から出るのも少し辛い。

今日から俺は高校生になる。今日から3年間、家から自転車で２０分のところにある藤ノ森北高校に通うことになる。俺は高校生になるのがとても楽しみだった。昨日だってわくわくしてあんまり眠れなかった、なんていうと子供扱いされそうだから誰にも言わないけれど。高校生ってだけでなんだか少しだけ、大人に近づける気がするんだよね。

緊張のせいか目覚まし時計よりも、だいぶ早く目が覚めてしまった。初日だし、少し余裕もって学校に行きたいから、起きることにした。まだ着なれない制服に袖を通し、軽い足取りでリビングに降りていく。

「あらずいぶん早いわね。んー、やっぱあんたは学ランのほうが似合うわね」

ブレザー姿の俺に母さんが声をかけてきた。

「見慣れてないだけっしょ」

俺は機嫌良く言い返す。

「入学式のときくらい、ネクタイはちゃんとしなさい」

父さんにネクタイを締め直された。なんだか男にネクタイを直されるのもちょっと嫌だった。一つ下の妹の千枝理がくすりと笑い、朝練あるから、と早々に家を出て行った。まだ寒いのにご苦労なこって。

両親は共働きで、今日の俺の入学式には出席しない。というか、仕事休んでまでこなくていいと俺がいったのだが。

中学生から高校生、１つしか変わらないはずなのに、なぜか中学生よりずっと大人なイメージがあって、親が入学式にくるのがなん

となく恥ずかしかったのだ。別に反抗期とか、親が嫌いってわではないんだけど。

「だから白石高校にすればよかったのに」

確かに白石高校なら学ランだったから新しく制服を買う必要もなかったし、あと２０分は寝ていられただろう。それでも俺は藤ノ森北高に行きたかったのだ。

理由はいろいろあるけど、一番の理由は通学距離だ。信号を２回渡るだけで着いてしまう白高より、登下校に時間がかかる藤北のほうが、部活帰りに友達と寄り道したりできて楽しいと思う。

こういうふうに考えるのにはちゃんとした理由がある。

俺の家は白石中学校の目の前にある。当然白中に３年間通っていたわけなんだけど、少し家が遠い友達とかはみんな帰りにマックやカラオケに行ったりしていた。俺はそれが羨ましかった。友達からは朝ゆっくりできて羨ましいとか、テスト前には勉強時間が多く取れるなとか、いろいろ言われていたけど、俺にとっては帰りの寄り道イベントのほうがよっぽど魅力的に思えた。

そんなくだらない理由で、と言われるかもしれないが、俺にとってはとても大事なことだと思えたし、両親もわかってくれた。両親、というよりは父さんが。

父さんは、中学高校時代の友達と過ごす時間は生きていく上での支えになる、って酔っぱらう度に言っていた。きっと父さんは中学高校時代がとても楽しかったんだと思う。

「おはようございまーす」

玄関が勢いよく開き、外の冷たい空気とともに大きな声がリビングに届いた。

「あらつっちゃん、わざわざ迎えにきてくれたの？」

そういえば昨日の夜に一緒に行こうとかメールがきていた気がする。

彼女は幼稚園からの幼馴染の桜井椿。家も隣ということもあって、小さいころからよく一緒に遊んでいた。中学のころは同じ委員にさせられたり、夫婦だとか冷やかされて、一時期あまり話さなくなってしまったこともあったけど、慣れてしまったのかお互い気にしなくなり、周りの冷やかしもいつの間にかなくなっていた。一人を除いて。

「つーか椿少し来るの早くない？」
「別に早くないよ？今日は歩きじゃなきゃいけないしねー」
椿はいった。
「…歩き？」
なんでわざわざ歩いて行かなきゃいけないんだ。チャリなら平気だけど、歩くと地味に遠いんだぞ。チャリで良いじゃん。
「今日はまだチャリ通駄目なんだよー？なんか届け？出してからって書いてあったじゃん」
知らなかった。危うく入学初日から遅刻するとこだった。椿、昨日返信しなくてごめん。早く起きててよかった。
ほんじゃ行ってきますと、椿と家を出た。

少しずつ日が昇り、暖かくなってきた道を歩きながら、なんかっちゃん荷物多くない？そんなことないよー、と他愛もない会話をして歩いた。だけど、どことなく二人はうきうきしていた。
「もーんちー！」
大きな声が後ろから聞こえた。聞こえていたけど、振り向きはしなかった。ったく、朝っぱらからデカい声で呼ぶなよ、恥ずかしい。
「もんちゃん、呼んでるよー？」
「知ってるよ、誰なのかも」
もんち、そう呼ぶのは親友の日向陽彦だけだ。
「なんで止まってくれんのさ！」
息を切らしながら陽彦が椿と俺の間に並ぶ。

「追いついたんだからいいだろ」
「つっちん、おはよ！」
「聞けよ」
陽彦とは小学校からの友達で、いつも椿と俺と、あと一つ歳下の千枝理とその友達の2人、合計6人で遊んでいた。
別に特別仲が良かったわけじゃないと思うんだけど、腐れ縁ってやつなのかな。中学のころはいつも3人だった。なんていうのかな、俺は、陽彦と椿の3人で過ごす時間が何よりも好きだ。好きって表現が正しいかはわからないけど、好きだ。この関係は、大人になっても変わることはないと思ってる。

「にしても、つっちん、新しい制服も似合っとりますね！」
陽彦がわざとらしく鼻の下を伸ばして言う。
そっか、椿も制服新しいんだった。確かに、前の制服よりも似合ってはいるかなぁと思った。思ってはいたけど、口には出さなかった。隣のやつに何言われるかもわかんないし。
「それに対して旦那様、一言もらえますか？」
陽彦はマイクを向けるフリをしながら聞いてきた。
「はるやん、高校でもそのネタ引っ張るのー？」
椿が笑いながら陽彦に聞く。ここで旦那様は華麗にスルー。
「つーか陽彦、何その荷物？」
俺は肩からかけた大きなカバン指さして聞いた。
「へへーん、実は今日から部活参加させてもらおうと思ってさ！」
陽彦は人差し指で鼻をこすりながら答えた。
陽彦は中学時代、野球部のエースで、背も高く顔もかっこいい。勉強もめちゃめちゃできる。しかしなんというか、抜けているところがあり、最初こそはルックスで女の子からちやほやされるものの、口を開くとその残念さが露呈してしまい、つけられたあだ名は『残念貴公子』。

「はるやん、今日は部活ないんだよー」
椿が横から笑いながら言ってきた。
「は？」
「今日は完全休養日だよー」
椿は藤北に推薦で合格し、春休み中から水泳部に参加させてもらっていたらしい。なんでも期待の新人だと自分では話していたけど、こんなとろとろした子が期待の新人だなんて、俺には信じられなかった。
「なんだよ、今日からは毎日野球できると思ったのにー！」
陽彦はとても残念そうに肩を落とした。
「つーか藤北は部活、毎日なんてないぞ」
「ふぇ？」
「藤北は文武両道を目指しているから、どの部活も週に5日だけなんだよー」
「何それ！」
こういうところが残念なんだよなぁ。
「つーか藤北行くのに知らないとかお前だけだぞ」
俺が藤北を選んだ理由の一つでもある。週に5日なら、適度に休めるし、勉強もちゃんとできるし、バイトだってできるかもしれないしな。
「がっかりしすぎて腹減ってきた。てかもんちは部活どーするん？」
中学時代は陽彦と同じ野球部だった。陽彦とは違い、背は低く力もなかったけど、陽彦の球を受け取れるのは俺しかいなかったから、ずっと試合には出ることができた。
部活を引退してからは、背も平均くらいにはなったし、野球が好きって言うよりも、運動が好きって感じだから、他の部活に入ろうかとも考えている。
いろいろ見学してから決めるよとだけ返事をしておいた。

そうこう3人で話してるうちに、学校についた。校門のところには『私立藤ノ森北高校入学式』と書かれた看板が立てかけてあった。
校門から玄関までの道は部活の勧誘であふれかえっていた。
なんで新入生を見分けられるのだろうと不思議に思っていたら、藤北は学年ごとにネクタイの色が違うらしいことに気付いた。俺たちのネクタイは紺色に赤のラインが入っている。チラシ配りしている先輩たちは、黄色か緑色のラインが入っている。今の段階ではどっちが2年でどっちが3年なのかは分からないけど。てかあれ？椿のやつはなんでネクタイ外してんだ？さっきまではしてたと思うんだけど。まぁ別にいいか。

「うひょー、あの玄関近くにいる先輩めっちゃかわいくない！？」
両手にたくさん部活の勧誘のチラシを持った陽彦が大声で叫ぶ。
「うっせーよ」
笑いながら突っ込みを入れ、俺もその先輩を探し出す。確かにかわいい。
一人だけ纏ったオーラが違うというか、みんなと同じ制服を着ているはずなのに、着る人が違うだけでこんなにも違うのかと、申し訳ないけど横にいる椿を見て思う。椿は椿でちゃんと着ているんだけど、その先輩はカーディガンの着方から、スカートの丈、髪型まで制服に合っていた。
あれ？でもあの人のネクタイ、赤いライン入ってないか？でも部活勧誘してるってことは、1年ではないだろうし。まぁいいか。

「あの人は2年生の本条秋菜っていうんだよー。」
本条先輩かぁ。やっぱ先輩だよな。
「見学だけでもいいから来てね」
玄関に着いたときに本条先輩から勧誘のチラシをもらった。チラシをもらうだけでここまでどきどきするものなのか。高校生の魅力って半端ないな。

『サッカー部』。マネージャーなのかな？
「…陽彦」
「ん？」
「俺サッカー部にするわ」
「単細胞め！」
俺たちは笑いながら、まだ誰の足にもフィットしそうにない新品の上靴に履き替える。
「まぁ、そういう青春網羅の仕方もありなのかもしれないけど」
陽彦は言った。
「はるやん、青春は網羅じゃなくて謳歌だよー」
椿が小馬鹿にする。
青春謳歌かぁ。良い響きだな。
「よし、俺は藤北で思いっきり青春謳歌してやる！」
声に出すと少し恥ずかしかったが、立派な目標に思えた。部活も友情も恋愛も勉強も、全てにおいて周りのやつより充実した高校生活を送ってやる！高校生活が余計楽しみに思えてきた！

「じゃあ俺は海賊王になる」
横で靴を履き替えている髪の長い男子生徒の不意をつかれたつぶやきに、思わず俺は吹き出してしまった。

桜井　椿

３人で校門をくぐると、たくさんの先輩たちが部活の勧誘を行っていた。私はもう水泳部に入ることが決まっている。もう入る部活が決まっていて、チラシをもらうのがめんどくさかったら、ネクタイを外しておきなさい、と水泳部の先輩に言われたことを思い出した。ネクタイしないのは、部活が決まっているっていう合図なんだって。私はすぐにネクタイを外してポケットにしまいこんだ。

隣のもんちゃんとはるやんの両手には、たくさんのチラシが持たされていた。もんちゃんは部活が決まってないから良いけど、はるやんは野球部ってきめてたから、ネクタイのこと、教えてあげればよかったかな。なんか楽しそうだからいいか。

なんかはるやんが騒いでる。あぁ、本条先輩か。確かにかわいいもんなぁ。もんちゃんもなんか、顔が気持ち悪くなってる。

「あの人は2年生の本条秋菜っていうんだよー。」

私は水泳部の先輩に聞いて知っていたから、2人に教えてあげた。でもなんで赤のネクタイしてるんだろう？しかもサッカー部のチラシ持ってるし。先輩、陸上部のはずだけど。

もんちゃんは先輩がサッカー部だと思い込んでるし。まぁ、あとで教えてあげればいいか。

「よし、俺は藤北で思いっきり青春謳歌してやる！」

もんちゃんはなんか本当に楽しそうな目標を見つけたみたい。なんでかな？私も少し嬉しくなった。

「じゃあ僕は海賊王になる」

男の子がぼそっと言った。

さっきの海賊王とか言ってた男の子、なんだったんだろう？もん

ちゃんと知り合いってことではなさそうだったけど。ていうかネクタイに黄色のライン入ってたから、2年生なのかな？でも1年生の下駄箱んとこにいたしなぁ。私の見間違いかな？あ、ネクタイ締め直しとかないと。危ない危ない。

そんなことを考えながら、3人でクラス分けが張り出されている掲示版を見に行った。

「みんなバラバラのクラスかよー！」

はるやんがすぐに大きな声で叫んだ。まだ私は自分の名前を見つけられないでいた。

「俺が3組、陽彦4組、椿は6組だよ」

もんちゃんが私の名前を指さしながら教えてくれた。1学年6クラスだから、さすがに3人とも同じクラスにはなれないとは思っていたけど、一人はさすがに不安だなぁ。

「なんかあったらすぐ来いよ」

もんちゃんは私とは違う意味で不安みたい。もんちゃんはいつでも私の心配をしてくれる。それはすごく嬉しいんだけど、私だってもう高校生なんだから。子供扱いしないでよ。

「大丈夫だよー。私よりもはるやんの心配したほうがいいんじゃない？」

「つっちんひでー！」

もんちゃんはしっかりしてるから大丈夫だと思うけど、はるやんはどっか抜けたとこあるし、やっぱりちょっと心配。って、きっと私に心配される理由も本人にはわかんないんだろうなー。

一緒に帰る約束だけして、3人はそれぞれの教室に向かった。

6組の教室は一番奥かぁ。はるやんと別れてから、5組を通り過ぎて教室に入った。なんか急に寂しくなってきた。

えーと、私の席は、あそこか。自分の席について、周りを見回す。知っている人は一人もいない。白中の人はほとんど白高にいっちゃうからなぁ。

藤北はレベル高いし遠いからね。はるやんはともかく、よくもんちゃんは合格したなぁと思う。私が藤北を受験した理由は、もんちゃんとはるやんが行くって言うから。はるやんは余裕だけど、もんちゃんはいっぱい勉強してたなぁ。ていうか、もんちゃんがいなきゃ、私もはるやんもこの高校にくる意味ないしね。受かってくれてなきゃ困るんだけどね。

「あっ」

思わず声を出してしまった。隣に座っている男の子がこちらを見る。

「あ、あの・・・さっきの、玄関で、海賊、王」

私は何を焦ってるんだろう。隣にはさっきもんちゃんに海賊王になることを宣言していた、男の子が座っていた。

「はじめまして、渚カヲルです」

「え？あの・・・」

何を言ってるんだろう、この子は。

「つっこめよ。寒いだろ、俺が」

そういうことか。

「えっと、千昭？」

「へー、今のはわかるんだ」

「うん。私の好きな映画だからねー」

あの青春って感じがたまらなく好きなんだ。あ、

「私は桜井椿。よろしくねー」

私は思い出したように自己紹介をした。

「僕は本条千秋。」

「本当に千秋っていうんだね」

「字は違うけどね」

本条くんは空中に字を書いて見せた。あれ？やっぱりネクタイのライン、黄色だ。見間違いじゃなかった。

「ち・あ・きーーー！」
まだ緊張している人ばかりの静かな教室に、大きな声が響いた。
本条秋菜先輩だ。ん？本条？
「どこにいたんだよ、姉ちゃん」
「それはこっちのセリフよ！」
なるほど、千秋くんと秋菜先輩って姉弟なんだ。
「あんた、ネクタイ間違えていったわよ！ほら」
先輩の手には赤のラインが入ったネクタイが握られていた。そういうことか。
「姉ちゃんのが部活の勧誘があるって、先にでていったじゃないか！」
黄色のラインが入ったネクタイを外しながら千秋くんが言った。
「いくら探しても陸上部の勧誘のとこにはいないしさ」
「あんたがサッカー部入るって言ってたからそっちの勧誘のとこで待ってたの！いつまでたっても来ないから、こうやってクラス調べてきてやったんじゃない！年下の彼氏できたのかって、みんなにからかわれて、すっごく恥ずかしかったんだから！」
「だから、僕のせいじゃないって」
二人はネクタイを締め直しながら、言い合っている。仲良しなんだなぁと、横から見て思った。
「じゃあ、あたし、もう教室戻るからね！」
先輩は走って教室を出て行った。そのあと、教室は一瞬静かになったが、今の先輩かわいかったねとか、今のって誰とか、急にざわざわし始めた。今のやりとりが、知らない人に話しかけるきっかけになったみたい。
「ふふっ」
思わず私は笑ってしまった。
「ったく」
千秋くんは少し赤くなりながら言った。

「さっきお姉さんが言ってた、彼氏ができたのか聞かれたって、どういう意味？」
私は秋菜先輩が言ってた言葉を思い出し、千秋くんに聞いた。
「藤北って恋人同士でネクタイ交換するんだって。なんか伝統らしいよ。だいたいの人は、同じ学年同士の人と付き合うから、ネクタイに書かれた名前を確認しなきゃわからないんだけどね」
「へー、そんな伝統があるんだー。おもしろいねー。確かに、違う学年の人同士で付き合うと、すぐにネクタイでわかっちゃうね。ていうか、違う学年のネクタイなんてしてたら、先生に怒られそうだね」
私は笑いながら言う。
「それなら大丈夫だよ」
千秋くんは言った。
「ここの高校、式とかなんかの行事の時にちゃんとした格好をしていたら、普段の生活ではある程度は自由な格好をしてても怒られないんだ」
「自由な格好って」
「たとえば学校指定のカーディガンとか靴とかカバンとかコートとか、いろいろあるけど、それを必ず着なきゃいけないってわけじゃないんだ。このブレザーとズボンだけはさすがに着てなきゃだめっぽいけどね」
千秋くんが笑いながら言った。笑うととても子供っぽくなるんだなぁと思った。
「へー、おもしろいねぇ」
「ただし」
千秋くんは声のトーンを上げて言った。
「さっきも言ったけど、今日みたいな入学式とかの行事の日だけは、絶対にちゃんとした格好をしなきゃいけないんだけどね。まぁ、普段自由な分、守らない人はほとんどいないよ。だから姉ちゃんも焦ってたんだと思う」

「なるほどねー」
「たぶん、入学式のあとに生活指導の先生から説明されると思うけどね」
やっぱりお姉ちゃんが同じ高校にいると、いろいろ知れていいなぁ。

「あ、私、ちょっとトイレ言ってくるね」
私はそう千秋くんに言って、廊下に出た。
廊下には、まだ自分のクラスに話し相手がいないらしい人たちが、中学生の友達同士で集まって話していた。よく見ると、女の子の集団は少ないかな？こういうときって、男の子のほうが、もともとの友達と集まりたがるんだなぁと思った。
「つっちん！」
「はるやん、もんちゃんも！」
2人は廊下で話していた。やっぱなんとなく教室に居づらいのかな？でもなんか2人に会うのすっごく久しぶりな気がするなぁ。
「久しぶり！」
はるやんが言った。はるやんも同じこと思ってたんだ。
「さっきまで一緒だったじゃんか」
もんちゃんは相変わらずだなぁ。まぁ良いけど。

「なにしてんのー？」
「俺のクラスに、木田鋼介っていう野球部に入るってやつがいてさ。そいつ、藤北中学校のキャッチャーやってたやつだから、もしかしてこいつと組むかもしれないなぁと思って、話してやってたんだ。」
「そうなんだー。そういえば、うちのクラスにサッカー部入るって言ってる子いたよー。」
「まじ？なんてやつ？」
「本条千秋くんっていうの。本条秋菜先輩の弟くんなんだよー。」
「マジで！？」

もんちゃんの食いつきっぷりっときたら、まぁ良いけど。
「っていうかもんち、もうサッカー部確定？」
「当たり前じゃん。弟もいるんだぞ？」
「えー！またオレの球受けてくれよー！日向を甲子園に連れてって！」
「俺は先輩を国立に連れていく。つーかお前は連れていく側だろ」
ここでチャイムがなった。そして放送がかかった。
「間もなく、入学式を始めます。新入生は各教室に入って・・・。」
あ、トイレ行かなくちゃ。
「じゃあもんちゃん、はるやん、また帰りにねー」
私はそう言ってトイレに向かった。そういえば、またもんちゃんに、秋菜先輩は陸上部だって言うの忘れちゃったなぁ。でも、なんかサッカー部に気持ち固まってきてそうだし、後で怒られちゃいそうだけど、なんか黙ってたほうがおもしろそうかも。

日向　陽彦（前書き）

個人的な理由で、これからは週に１回以上を目安に投稿していくつもりです。
この話はまだまったく先の展開をきめていないので、今後の展開に合わせて、前に投稿した話もちょくちょく編集するかもしれないですが、ご了承ください。
２０１１／０５／１０

日向　陽彦

みんな違うクラスとかつまんねーなぁ。まぁしょうがないとは思うんだけど、もんちとは一緒がよかったなぁ。なんかサッカー部にとられちゃいそうだしなぁ。

あれ？ここってオレの席だよな？黒板に書かれた自分の席には、髪の短い女の子が目をつぶってが座っていた。黒板に書かれた席順と、自分の出席番号が書かれた紙を念のため３回確認した。やっぱしあってるよなぁ。話しかけてみっか。

「すいませんけど、そこオレの席だと思うんだけど」

「・・・・・・」

「・・・あの、すいません」

「・・・・・・」

ここまで露骨にシカトされると、逆に気持ちいいな。

「すいません」

普段から割とでかいほうなんだけど、今度はいつもより少し大きめな声を出していった。少しクラスの人から注目された気がした。

「・・・・・・」

少女は相変わらず無視。ん？よく見たら、ブレザーのポケットからコードが出ている。どうやら音楽を聴いているらしい。女の子って、ショートカットでも耳隠してると、音楽聴いてるのかわからないもんなんだなぁ。でも人の気配とか感じないもんかね？

しょうがないから、トントンと、女の子の肩をたたいた。

「ひゃっ！」

完全に自分の世界に入り込んでいた女の子は、外界からの接触に声を出して飛び上がって驚いた。飛び上がった拍子に、ブレザーのポケットから、ＭＤプレーヤーがガシャンと大きな音をさせて床に落ちた。ていうか、いまどきＭＤって、俺も世代ではあるけどさ、なんか懐かしいな。俺はＭＤプレーヤーを拾い上げながら女ん子に

声をかけた。
「ごめんな、驚かせるつもりはなかったんだけどさ。あ、これ、壊れてないかな？」
オレはＭＤプレーヤーを確認した。とくに目に見える傷はついていないようだった。大丈夫そうかな。汚れちゃってたら申し訳ないから制服の袖で軽く拭いた。はい、とＭＤプレーヤーを手渡そうとした。
「・・・？」
なんで受け取らないの？ていうか、なんか泣きそうになってる！？しかもなんか震えてる！？
「あ、あの、ごめんな！？そこたぶんオレの席だから、それを言おうと思っただけで。別に、驚かせるつもりでは・・・」
「あ、す、すいません！でした！」
女の子は黒板を見て自分の席を確認し、オレの手からひったくるようにＭＤプレーヤーをとり、カバンを隣の席に移動させ、走って教室を出て行ってしまった。
なんか、オレ、悪いことしたかな？なんか周りの人からの視線がチクチク痛いんですけど。
「あははは・・・、な、なんだったんだろうな？」
誰も答えてくれない。悪くないはずなのに、お前が悪いって言われてる気がした。
「えぇと、ト、トイレ行ってこよう」
周りの空気に耐えられなくなって、オレは教室を出た。

「なんだったんだよ、あいつ。オレが何したってんだよ」
ぶつぶつ文句を言いながら、廊下を歩いてると、３組の教室からもんちが出てきた。
「陽彦、お前もトイレか？」
「もんち！」
さっきまで一緒だったのに、なんだか懐かしい気がして、テンシ

ョンが一気に上がった。女の子のことはすっかり忘れてしまっていた。
「うちのクラスにさぁ、木田鋼介ってやついんだけど、知ってる？」
「木田鋼介？」
「藤北中でキャッチャーやってたやつなんだけど、覚えてない？」
あぁ、なんとなく覚えてる気がする。なんか小さいキャッチャーってイメージがあったなぁ。
「もしかしたらお前と組むことになるんじゃね？」
「なるへそね。でもオレは、あ、つっちん！」
ちょうど教室から出てきたつっちんを見つけ、自然と声をかけていた。
「はるやん、もんちゃんも！」
「久しぶり！」
「さっきまで一緒だったじゃんか」
たしかにそうだけど、なんか久しぶりな気がして。
「なにしてんのー？」
「俺のクラスに、木田鋼介っていう野球部に入るってやつがいてさ。・・・」
もんちがつっちんに説明した。うーん、小さいってイメージだけで、申し訳ないけどそれ以外記憶にないなぁ。まぁ、キャッチャーってピッチャーがうまいかどうかにもだいぶ左右されるから、実際に組んでみないとわからないんだけど。

「そうなんだー。そういえば、うちのクラスにサッカー部入るって言ってる子いたよー。」
「まじ？なんてやつ？」
「本条千秋くんっていうの。本条秋菜先輩の弟くんなんだよー。」
「マジで！？」
おいおい、もんち、ずいぶん食いつきがよすぎやしないかい？オレはまだお前と一緒にやりたいと思ってるんだぞ。

「っていうかもんち、もうサッカー部確定？」
「当たり前じゃん。弟もいるんだぞ？」
「えー！またオレの球受けてくれよー！日向を甲子園に連れてって！」
自分でよくこんな寒いこと言えるなと思った。
「俺は先輩を国立に連れていく。つーかお前は連れていく側だろ」
まったくだ。でもオレはまだもんちとやりたい、と言おうとした瞬間にチャイムがなった。そしてすぐあとに放送が流れた。
「間もなく、入学式を始めます。新入生は各教室に入って・・・。」
「じゃあもんちゃん、はるやん、また帰りにねー」
つっちんはトイレのほうに走って行った。そういや、オレもトイレに行ってないや。あぁでも、別にオレはトイレに行きたかったわけじゃないし、別に良いか。あの教室の張りつめた空気から逃げたかっただけだし。
「じゃあ俺も教室戻るわ。またあとでな」
もんちも自分の教室に戻って行った。オレも戻るか。

教室に入って自分の席につくと、すぐに若くてきれいな女の先生が入ってきた。
「すぐに体育館に移動するから、廊下に出席番号順に並んで」
席を立ち廊下にでようとすると、制服の袖をグイっと引っ張られた。振り向くとそこには、さっきの女の子がどこか申し訳なさそうに立っていた。やべぇ、この子のことすっかり忘れてたな。
「あ、ええと、さっきはごめんな」
とりあえず謝ってはみたが、自分でも何に対しての謝罪なのか、よくわからなかった。
「あ・・・の、これ」
女の子は小さな紙を手渡してきた。なんだこれ？そこには
『さっきはすみませんでした。　三島　柚希』
とだけ、かわいらしい字で書かれていた。

「別に誰でも間違いはあるし、気にしなくてもいいよ」
オレがその子にそういうと女の子は、少し照れくさそうに笑った。か、かわいい。なんか小動物系？っていうのかな。恋愛感情ってよりは、守ってやりたくなる感じ？あれ？それって恋愛感情？
三島さんはぺこりとお辞儀をして、廊下に出て行った。オレも廊下に出て、他のクラスメイトが並んでるように、出席番号順になるよう間に入った。・・・ていうか、三島さん隣じゃん。なんかちょっち気まずいんだけど。

入学式中、最初こそなんとなく三島さんのことを意識はしてしまっていたけど、途中の校長の話やら生徒会長やらの、長くてありきたりな話を聞いているうちに、なんだか眠くなってきて、三島さんのことを考えるよりも、寝てしまわないようにすることに集中していた。寝ないことに集中ってのも変な話だけどさ。ていうか三島さんからすごく良い匂いがしてさ、なんか落ち着くっていうか、気持がフワフワした感じになっちゃって。なんかオレ変態くさい？
入学式のあとは、講堂に移動して生徒指導の先生の話。藤北の校則の話らしい。なんかいかにも厳しそうな先生が竹刀片手に話し始めた。
「入学おめでとう！これから私立藤ノ森北高校の生徒として、自覚と責任を持ち・・・。」
まただらだらとした話が続くのか。要はいろいろな校則はあるけど、入学式とか卒業式とかの儀式みたいなときにちゃんと守れば、普段は多少甘く見てやるってことだった。そんなの知らないで来てる奴いるのか？むしろ藤北の最大の魅力だと思うけど。オレも、もんちが行くって理由を外せば、それが一番の理由だし。
唯一知らなかったのは、これは昔の先輩たちが、先生たちから勝ち取った権利だってこと。なんでも、当時の風紀委員が『わが校の生徒は校則を１００％守ることはできる。ただ守り続けろと言われると、半分以上の生徒は何かしら校則を破るだろう。だから完璧に

校則を守らなきゃいけない日を決めてもらえれば、その日だけは完璧に守って見せます。』みたいなことを言ったらしい。でもそれって裏を返せば、その日以外は守れないかもしれないけど大目に見てください、ってことだもな。まぁ年々自由さが増してったとか、そういうことなんだとは思うけど。何にしても当時の風紀委員さん、グッジョブです。

教室に戻り、これから先の日程を聞いた。藤北は本当に変わっていて、入学式から少し間をあけてからお迎えテストがある。普通学校始まったらすぐにテストやるもんじゃないの？まぁでも助かる人もいるか。高校合格から入学までの間に、勉強するやつなんかあんまいないもんな。もんちも助かる側だろうし。またテスト終わるまでは学校帰りはつっちん家通いだな。もんちに勉強教えなきゃ。今日チャリ通許可届けみたいなの出したから、明日からチャリでこれるしな。ていうかテスト終わるまで部活出ちゃダメとか。まぁしょーがないか。

「高校生になったからって浮かれて寄り道しないで、今日はまっすぐ帰りなさいね」

廊下に出ると、うちのクラス以外の生徒はまだ教室からでてきていなかった。まだ帰りのＳＨＲが終わっていないらしい。玄関で待つか廊下で待つか少し迷ったけど、めんどうだから教室で終わるのを待つことにした。もんちは３組だからわからないかもしれないけど、６組のつっちんは玄関に向かう時、必ずうちのクラスの前を通らなきゃいけないから、帰る約束してるしたぶん覗いてってくれると思う。

自分の席に座って待とうと教室に戻ると、そこには三島さんが一人で座っていた。なにやってんだろ？ＭＤプレーヤーかな？

「三島さん、何してるの？」

オレは驚かせないように、できるだけ優しい声で話しかけた。

「あ・・・ひゅうがくん、これ、鳴らなくて」

・・・それってもしかしてオレのせい？いや、もしかしないよな。今朝驚かせちゃったときに落としてたし。ていうかオレ、『ひゅうが』じゃなくて『ひなた』なんだけど。まぁあとで訂正しよう。それよりも、

「ごめんな。それたぶんオレのせいだよな」

「・・・あなたは、何も」

気を遣ってるのか。女の子に気を遣わせてしまった。

「落としたのは、私だから」

「でも驚かせたのは、オレだし・・・」

「あなたは、驚かせる気はなかった」

この子っていつもおどおどしてるのかと思ってたけど、普通に話せるんだな。なんか今は小動物って感じはしないなぁ。や、別に残念ってわけじゃないけど。

「ちょっと貸して」

オレは三島さんからＭＤプレーヤーを受け取り見せてもらった。さっぱりわからんのだが。弱ったなぁ。

「あ、もしよかったら、オレのｉＰｏｄあげようか？中古で申し訳ないんだけど」

合格祝いに新しいのを買ってもらえるし、ナイスアイディアだと思った。

「これじゃないとだめ」

速攻断られた。

「でも今ＭＤなんか聴いてるやついないよ。みんなｉＰｏｄかＳＯＮＹの・・・」

三島さんがオレのことをキッと睨んだ。いや、そんな気がしただけかも。あ、もうひとついいアイディアが浮かんだ。

「オレの友達に機械に強い奴がいるんだけど、そいつに見せてみない？」

「あなたの友達・・・」

「あぁ、親友の橘椛っていう３組にいるやつなんだけど、今日一緒

に帰る約束してるから、帰りに頼んでみるよ」
「その人信用できるの？」
変なこと聞くな？
「親友だからな、オレは誰よりも信用してるよ」
嘘はなかった。あんなに信用できるのは、他にはつっちんくらいだ。
「じゃあ、頼んでみようかな」
三島さんは少しだけ微笑んだ。
「笑ってるほうがかわいいじゃん」
本当に心からそう思った。三島さんは笑うと小さなえくぼができる。目は少し細くなり、小さな黒眼がきらきらと輝いてるように見えた。
「え・・・、あの、その・・・」
せっかく普通に話せてたのに、これじゃだいなしかもな。でもそう思ったんだから、仕方ない。・・・仕方なくはないか。
「あの、じゃ、じゃあ・・・、これ、お、お願い、します！」
「あ、アドレス聞いといてもいい？なんかあったときに便利だし」
これはいい口実になると思って勇気を出して聞いてみた。
「あ、はい」
三島さんはにこっとして、ケータイを取り出した。
「え！？」
オレは思わず声を出して驚いた。スマートフォンって！ＭＤ聞いてるような子が、そんなハイテクなケータイ使ってるとは思わなかった。
「・・・？」
三島さんは不思議そうに首を傾けてる。
「あ、ごめん。えぇと赤外線、俺が受信で良い？」
「あ、これ、赤外線なくて」
そういやスマートフォンには赤外線ついてないのがあるって、もんちから聞いた気がする。

「あなたのアドレス、表示させて」
オレは自分のアドレスをケータイに表示させた。三島さんはそれにスマートフォンのカメラを向けた。写真を撮るのかと思ったら、ケータイにアドレスとか名前がテキスト化されて表示されていた。こんなこともできるとは、なんてハイテクなんだ。
「夜、メール送るね」

「陽彦ー。帰ろうぜ」
「あ、もんち」
もんちが教室に入ってきた。
「そだ。こっちはさっき話した橘椛。んでこっちは、クラスメイトの三島さん」
オレは二人に思い出したように紹介した。
「あ？」
もんちはなぜ急に紹介されたのかわからなかったらしい。いきなりだしな。
「あ・・・、その、し、失礼します！」
三島さんは走って教室を出て行ってしまった。なんか小動物に戻ってたな。
「え、何？」
三島さんの後姿からオレに視線を戻しながらもんちが聞いた。
「帰り道に説明するよ」
オレはそう言って教室を出た。三島さんに名字訂正できなかったな。まぁべつに今すぐじゃなくてもいいか。
・・・三島さん、今晩メールくれるかな。

橘　椛（前書き）

今までのを読み返してみると、文章とか打ち間違いとかひどいですね。見つけたら直すようにしていきたいと思います。

興味を持ってもらえるように、魅力的な文章を考え選んでるつもりですが、なかなかうまくいかないですね。やっぱ女子高生の感性たっぷりの文章には敵わないです。

橘　椛

「はぁ？ＭＤプレーヤー？」
「そう！もんち直せない？」
帰り道、３人で歩いているときに、陽彦がＭＤプレーヤーを直せないかと聞いてきた。ＭＤって、まだ聞いてる奴いたのか。
「なんかオレが驚かせちゃって、その拍子に落として鳴らなくなっちゃったみたいなんだよね」
こいつは入学初日から女の子驚かせるとか何やってんだ。しかもＭＤプレーヤー壊すとか。
「ていうか、なんで俺が直さなきゃなんねんだよ」
「だってもんち、機械得意じゃん」
「ちっとも理由になってないんだけど」
「まぁ実際得意なんだし、直してあげたら？はるやん、困ってるみたいだし。代わりに勉強教えてもらえばいいよ」
椿め、他人事だと思って。まぁ確かに、勉強は教えてもらうつもりだったけど。
「とりあえず、見せてみ」
俺は陽彦からＭＤプレーヤーを受け取った。見た感じは何が原因かは分からないな。ＭＤを取り出して、中も確認してみたけど、これといって何も。とりあえず、イヤホンを耳につけて再生ボタンを押してみると、陽彦が言うとおり、音楽は鳴らない。ただ、動いてる音はしている。
「陽彦、ｉＰｏｄ貸して」
「ほい」
陽彦はポケットからｉＰｏｄを取り出して俺に渡した。まだ新しいのは買ってもらってないのか。俺は陽彦のｉＰｏｄからイヤホンを外し、本体は陽彦に返した。
「何してんのー、もんちゃん？」

「動いてる音はするから、イヤホンのせいかなと思って」
ビンゴだ。ＭＤプレーヤーについていたイヤホンの接続端子の部分が傷ついている。陽彦から借りたイヤホンだとちゃんと鳴るし。しかも俺の好きなＺＯＮＥのｓｅｃｒｅｔ　ｂａｓｅが流れてる。しかもＰｉａｎｏ　Ｖｅｒ．だ！やっぱ聞いてる人いるんだなぁ。なんか原因を発見できたよりも、俺の好きな曲が流れたことのほうが嬉しく感じる。
「うん、これならイヤホンを変えるだけで大丈夫だ。プレーヤー側の接続部分が変になってなくてよかったな」
「よかったー」
陽彦はため息混じりの声を出した。
「やっぱりもんちゃんはさすがだねー」
「まあね」
でもたぶん誰でもわかったんじゃないかな。音が鳴らなくなったら、イヤホンとか普通変えてみんじゃねーの？
「じゃあ、イヤホンを弁償するだけでいいんだな」
「でもこれ、ノイズキャンセリング機能ついてるやつだから、結構高かったと思うぞ」
「まじで？どんくらい？」
「１万くらいはすんじゃね？」
「１万！？直せない！？」
「さすがにそれは。あ、俺ん家にあるやつ、安く売ってやろうか？」
たしかうちにも使ってないやつがあったはずだし。ちょっと型は今のよりも古いけど。
「さすがもんち！助かるわー！」
「よかったねー、はるやん」
「椿ん家着いたら持ってきてやるよ」
「サンキュー！」
テスト前になると、俺たちはよく椿の家で勉強した。家っていう

か、店なんだけど。椿は小さいころに両親を亡くしたみたいで、俺ん家の隣の喫茶店をやってるじいさんとばあさんに引き取られたらしい。俺は小さいころ、じいさんがくれる飴が好きで、よく喫茶店に遊びに行っていた。中学生になってからは、部活帰りによく陽彦とばあさんのオムライスを食いに行ってたし。さすがに夜になると客はあんまりこなくなるから、俺らは勉強スペースに使わせてもらってた。

やっぱ歩きだと結構時間かかるな。まぁ明日からチャリで行けるから良いか。家の前の坂道以外はずっと平坦な道だし。俺と椿の家は、坂道の途中にある。陽彦の家はその坂をもう少し上ったところだ。椿の家の喫茶店の前に着くと、コーヒーの良い匂いがした。このコーヒーの匂いがしたら、帰ってきたって気持ちになる。3人で喫茶店に入ると、いつものようにじいさんが迎えてくれた。喫茶店の中に入ると、コーヒーの匂いに加え、少しだけ線香の匂いがした。

「おかえり椿、他2名」

「他って」

じいさんは俺と陽彦をよく椿のおまけとして扱った。にしても、相変わらず元気なじいさんだな。こりゃまだまだ長生きしそうだな。

「はるちゃん、今日はうちでご飯食べていくんだってね」

ばあさんが言った。ご飯食べていく？喫茶店で？

「え？何の話？」

「聞いてないのかい？今日はお父さんもお母さんも遅くなるから、晩御飯お願いしますって言われてるんだけど」

うちの親はよく帰りが遅くなるから、晩御飯は椿の店で食べさせてもらうことがある。でもそれ、本人に言わなきゃ意味なくない？もしまっすぐ家に帰ってたらわからなかったじゃん。

「そうなんだ。じゃあお願いします」

「ばーちゃん！オレも食って行っていい？」

陽彦は聞いた。

「はいはい、そのつもりでしたよ」

「やりー！」
まぁばあさんのオムライス、久々だしな。陽彦はばあさんのオムライスが何よりも好物だし。
「じゃあ俺、着替えて荷物とってくるわ」
「私も上で着替えてくるね」
俺と椿はそれぞれ店から出て行った。

俺は玄関のカギを開けて家に入った。玄関を開けると、千枝理のスニーカーがあった。もう帰ってるのか？
「ただいまー！」
俺は大きな声で言った。
「あれー？もんにぃ早いね？」
「入学式だけだったしな。それよりちえも早くないか？」
「今週はテストだから早く終わるんだ」
そっか。そういや休み明けってすぐテストとかだもな。
「なるほどな。そういやちえ、今日母さんたち遅いらしいけど、知ってたか？」
「うん、もんにぃと食べなさいって」
じいさんたちには晩御飯よろしくって言ってあるのに、ちえにはじいさんとこで食べるって言ってないんか。うちの母親も抜けたとこあるからな。
「晩はじいさんとこで食べるぞ。すぐだとできると思うけどできたら呼びにくるな。もんにぃはできるまで椿たちと勉強してるから」
「ちえも行く」
「勉強の邪魔になるだろ」
「ちえも勉強するんだもん」
あ、そうか。テスト期間なんだもな。それなら別に問題ないか。
「じゃあもんにぃは準備してから行くから、ちえも勝手にいってろよ」
「ほーい」

俺は自分の部屋に入って私服に着替え、勉強道具と陽彦に渡すイヤホンを持って家を出た。

椿はまだ降りてきていないみたいだった。陽彦はケータイをいじってる。良いよな勉強できるやつは。テスト前でもいつもゆっくりしてやがる。・・・あぁ椿はいっつもゆっくりか。

「ほら陽彦、持ってきてやったぞ」

俺は陽彦にノイズキャンセリング機能のついたイヤホンを渡した。これだって当時は2万くらいしたんじゃなかったかな。

「もんち、三島さんにアドレス教えてもいい？」

陽彦はイヤホンを受け取りながら聞いた。三島さん？って陽彦の教室で俺を見るや否や走り出して逃げた子だよな？

「なんで俺のアドレスを・・・、あ、ひょっとしてお礼か？いいよべつにそんなこと」

「や、なんか聞きたいことあるらしいよ」

今陽彦とメールしてるなら、陽彦伝いで聞けばいいじゃん。あ、ひょっとして、直接じゃないと聞けないことなのか！？もしかして、俺に気があるとか！？一目惚れか！？そーかそれであんとき、あまりの衝撃に逃げ出しちゃったのか。いやー、まいったなぁ、俺には本条先輩がいるのに！

「そういうことなら仕方ないな」

顔がにやにやしないよう堪えながら言った。

「じゃあ教えとくね」

陽彦がメールを送り、ケータイをしまうとすぐに俺のケータイが鳴った。知らないアドレスからのメールだった。三島さん早っ！そんなに俺とメールしたかったのか。さっそくメールを開いた。

『ＭＤ、大丈夫？』

・・・普通さ、『三島です。さっきはすみませんでした。いきなりですいませんが・・・』とか前置き入れない？初めてのメールだぞ？しかも知り合いとも呼べないレベルの関係だし。せめて『大丈

夫ですか？』とか、敬語くらい使ってくれればいいのに。ていうか俺のドキドキを返せ。誰だかわかってはいるけど、一応陽彦にアドレスを確認してもらった。
「もうきたの？・・・うん、三島さんのアドレスで間違いないよ」
「三島さんってどんな子なの？」
「うーん、最初こそは挙動不審っぽかったけど、話してみると意外に普通だったかな」
「普通、ねぇ・・・」
『はじめまして。橘椛です。ＭＤはイヤホンが壊れてただけだから、心配いらないよ。陽彦に渡しておくね』
とだけ返信をしておいた。

二階からダダン！というものすごい音と振動が聞こえた。またちえのやつか。迷惑だからやめろってあんだけいってるのに。すぐに二階から椿とちえが話しながら降りてきた。
「ちえ！迷惑だから椿の部屋のベランダに飛び移るのやめろって言ってるだろ！」
「いいじゃん、楽なんだし！」
ちえの部屋の窓を開けると、すぐ目の前には椿の部屋のベランダがある。ちえは小さいころから、よく窓からベランダに飛び移って椿のうちに遊びにきていた。ただ小さいころならまだしも、今ではちえも中学３年生。いくら女の子とはいえ、成長期真っ盛りの運動部、それなりに体重があるってことをちゃんと自覚していない。
「まぁ、お客さんもいないからそんなに怒らなくてもいいじゃない」
ばあさんは柔らかい口調で言った。
「そーだぞ、椛。女の子は元気すぎるくらいのほうがもてるんじゃ」
「もんにぃは柔軟さに欠けるよね」
「柔軟さは関係ないだろ」
ちえのやつめ、じいさんばあさんを味方につけるとは。

「じゃあ、勉強はじめようかー」
椿が言った。しかしそこで俺のケータイが鳴る。三島さんからだ。
『取りに行く』
取りにって、ＭＤのことだよな。別に明日で良いんじゃないのか？もう外も暗くなってきてるぞ。
「陽彦、三島さんＭＤ取りに来るとか言ってるんだけど」
「三島さんってＭＤの持ち主ー？」
「うん。オレにも取りに行きたいってメールきてる」
わざわざ陽彦にもメールしてるのか。どっちかでよくないか？
「三島さんって誰？」
ちえが聞いてきた。
「高校の新しい友達みたいだよー」
「ふーん」
「取りに来るにっていっても、ここ知らないよな？」
「うん。オレ、ちょっと届けてこようかな！」
陽彦は顔を輝かせていった。
「陽彦、三島さんの家知ってるのか？」
「知らないけど、住所聞けば近くまではいけるでしょ」
「まぁ確かにな。てか勉強はそうすんだよ」
「つっちんに聞けばいいじゃん」
「椿は感性で覚えてるから、説明されてもわかんねんだって」
「もんちゃんひどーい」
「もんにぃひどーい」
椿とちえが言った。だってほんとのことだし。なんで？って聞いても、なんとなくって教えられて納得できるわけないじゃん。
「もんにぃの理解力の悪さを椿ちゃんのせいにされてもねぇ」
「ちえには関係ないだろ」
「まぁまだテストまでには時間あるんだし、明日から教えてやるからさ」
「・・・ま、それもそうだな」

「やった！ありがともんち」
じゃあ今日は飯食ったら解散だな。椿と二人じゃ勉強はかどらないし、かといって一人だと絶対やらないし。
「じゃあ椿ちゃん、ちえの勉強教えて」
「うん、いいよー」
「こいつの教え方じゃ伸びないぞ」
俺はちえに言った。理屈とか全然わかってないくせに、点数だけは良いんだよなー椿は。
「ちえはどうしてとかはどうでもいいんだもん。その場しのぎで十分なのだ」
なのだって言われても・・・、まぁ良いか。
「とりあえず、先に飯だけ食っちゃうか。ばあさん、晩飯お願いしまーす」

「はい、おまちどうさま」
ばあさんがテーブルに皿を並べた。ん？オムライスじゃないのか？
「ばーちゃん！オムライスじゃないの？」
陽彦が不満そうな声で言った。
「ごめんねー。一人分なら卵あるんだけど。一人だけオムライスなら不公平になっちゃうでしょ？だから今日はハヤシライスで我慢してね」
ばあさんは優しい声で言った。こんな澄んだ優しい声で言われたら、我慢するしかないよな。俺はハヤシライス好きだからいいけど。
「ちぇー、次はオムライスにしてよね」
「はいはい」
できたてのハヤシライスはとてもおいしくて、オムライスを食べたがっていた陽彦も、おかわりをしていた。
「そーいえば、藤北高って藤北中からだと試験多少楽なんだって」
俺は鋼介から聞いた話を話した。
「は？なんで？隣だから？」

陽彦は聞いた。隣だからって理由にならないだろ。・・・まぁ遠くはないけど。
「昔は中高一貫だったらしいよ。中学で試験受けてあとはエスカレータ式で高校だったんだけど、なんか試験ない分徐々に高校の成績が下がってきたらしくてさ、このままじゃまずいと思って、中学からのエスカレータをやめて、試験受けさせるようにしたんだって。ただ、俺らがやったような面接とか口頭試問とかは免除なんだってよ」
「えー！なんかそれずるくねー！？」
「でも私たちみんな合格したんだから別に良いじゃん」
椿が言った。たしかにな、最初はずりーって思ったけど、俺らはそれでも全員受かってるんだから変わんねえよな。
「でもその分試験勉強に集中できたってことっしょ？ってことはオレらより勉強してたんだから、オレらよりテストの点良かったってことっしょ？なんかすでに差ぁついてる気ぃしない？先生たちだって結局は頭いい奴らかわいがるもんだし」
たしかに。そこまで深読みしてなかったな。たしかに先生たちはなんだかんだテストの結果重視だよな。そう思うと陽彦が言うとおり、スタートラインからすでに差ぁできてる気がするな。ちょっとむかつく。
「それならお迎えテストでその人たちより良い点取ればいいよー。みんなのこと見返してやろうよ」
椿はなかなか大変なことをさらっと言っちゃうのがすごいよな。普段ボーっとしてるくせに。
「藤北って確かテストの順位掲示板に張り出すよな？よし、じゃあオレらの目標は全員学年１０位以内な！」
「１０位以内って！無理に決まってんだろ！俺がどんだけ勉強して藤北入ったと思ってんだよ！」
「はるにぃ、さすがにそれは厳しいんじゃない？もんにぃは２００位が良いとこだよ」

ちえが言った。２００だと！？１年生全部で２４０人だぞ！？いくらなんでも２００位は越えるわ！・・・たぶん。
「ちえちゃん、それはさすがに馬鹿にしすぎだよー。もんちゃんでも１８０位は越えると思うよー」
椿、なんかリアルなんだが。てかあんま変わらなくないか？１８０位もさすがに越えると思うぞ。・・・おそらく。でもなんかむかつくな。よし。
「じゃあ全員１００位以内を目標にしよう！入らなかったやつはみんなに昼飯な」
俺は言った。１００位なら今から頑張ればなんとかなりそうだし。そしてなんか賭けたほうがやる気出るしな。我ながら良いアイディアだ。
「１００位ならオレとつっちんはほぼ確実だぞ？」
う・・・、たしかに。入らないとしたらたぶん俺だけだな。
「じゃあ３０位にしようー。それなら私たちも入れるかどうか微妙だし」
「それだと俺がほぼ確実に入れないぞ」
情けない。
「じゃあオレとつっちんは３０位以内、もんちは８０位以内で良いんじゃね？」
「そうだねー、そうしよっかー」
「待て待て！なんで８０位なんだよ。話の流れからして俺は１００位だろ」
「目標は少し高めに設定したほうが良いんだよ」
まぁそうかもしれないけどさ。８０位なんて自信ないんだけど。
「まぁオレがしっかり教えてやるから、心配すんな」
「いや、でも・・・」
「オレなんかもんちに教えながら３０位以内目指してんだぞ」
う・・・、それ言われたらなぁ。まぁ陽彦もいるし、８０位ならなんとかなるか。・・・もしかしたら。

「ごちそうさんでした！んじゃ、オレそろそろ行くかな」
ハヤシライスを食べ終わった陽彦は、勢いよく立ちあがって言った。
「俺も一緒に行くわ」
俺も立ち上がって言った。
「は！？空気読めよもんちー」
「だって勉強しないなら俺暇だし。椿はちえの勉強教えなきゃいけないから、話してる余裕ないだろうし。近くまで行ったら、どっか別の場所にいっから良いだろ？」
「んー、まぁそれなら別に良いか。んじゃ、行くか！」
「ちえ、もんにぃはまっすぐ帰るから、あんまり遅くならないように帰れよ」
「はーい、いってらっしゃーい」
「いってらっしゃーい」
俺と陽彦は、椿とちえの声を背中に受けながら店を出た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9475s/

S.O.S.～青春謳歌作戦～

2011年5月15日17時25分発行